

# 安全安心 住民の絆から

「地元住民の安否をいかに確認するかが防災の『一丁目一番地』だ」。

松本平を流れる奈良井川に近い松本市島立の大庭町会は今春、防災力向上へ新たな仕組みづくりの検討に追われていた。

▽必要な情報をどう収集・発信するか▽長期の避難所運営を可能にする自主防災組織をどう構築す

## 未来をひらく

《第1部》ふるさと×アップデート

るか。まずは身近な大庭公民館に逃れ、次に地区拠点の島立体育館へ移る従来の考え方から脱皮しようとしている。

きっかけは、千曲川が氾濫した令和元年の台風19号災害、翌年からの新型コロナウイルスの感染

拡大だ。大水害では避難が間に合わない住民も出

かねない。島立体育館は避難者で「密」になるた

め、1次避難所の大庭公民館も長期対応がある。

そこで目を付けたのが「隣組」というかつての

隣近所のつながりだ。復活を模索し、藤森潔町会

長(66)は「防災力強化

### ③ 地域防災力の向上 急務

には「トップダウン」から「ボトムアップ」へ転換がある」と語る。

◇ ◆◇ 初期消火や水防活動といった地域防災の実動を担う消防団員は減少の一途をたどる。松本市消防団の団員数はここ10年間

定数(2169人)を下回り、令和元年に2000人を割り込んだ。少子

高齢化や生活様式の変化にあつて、若い団員の確保に悩み、最高齢は70代

に達する。ある分団は昨夏、新興住宅地の全戸を

訪ねて勧誘に努めたが、応じた住民はたった1人

だった。

上條博文団長(52)は「団員同士のつながりや絆が安全安心のコミュニティをつくる。団員が減って困るのは住民自身だ」と警鐘を鳴らす。



「防災」を重視してきた。公民館を基地局とも連携し、地元の消防団とも連携し、

会を結ぶ無線ネットワークも構築する。住民自身

の助け合い(互助)の体制が欠かせない」と指摘する。

水害から守るため、新たな防災体制を模索する大庭町会の役員たち(松本市島立)

水害から守るため、新たな防災体制を模索する大庭町会の役員たち(松本市島立)

が災害時に情報共有や役割分担ができる防災力の底上げが狙いだ。奥原直弥主事(38)は「家庭と町会、消防団、公民館が平時から顔が見える関係を築く。それが強みになる」と力を込める。

信州大学地域防災滅災センター長の菊池聡教授は「大災害時に救急車はまず来ない。急いでいるのではなく来れない。被災から数日間は自力(自助)、そして近所の仲間との助け合い

間との助け合い(互助)の体制が欠かせない」と指摘する。

水害から守るため、新たな防災体制を模索する大庭町会の役員たち(松本市島立)

#### みんなの一言

・他人が何をしてくれるのかではなく、自分が何をし

てあげられるかが大事。用水にごみがないのはみんながきれいにしてくれるから。消防団活動もそう。地域の一員として役割を担うのは当然。それは地域活動も仕事も同じ。

(安曇野市穂高有明、クラフト作家女性、63歳)

※市民タイムスのHPなどのアンケートより



市民タイムス創刊50年